

李商隠詩における「傷春」について 「曲江」詩を中心に

著者	大山 岩根
雑誌名	集刊東洋学
巻	112
ページ	22-40
発行年	2015-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/00132742

李商隱詩における「傷春」について

——「曲江」詩を中心に——

大山 岩 根

はじめに

唐の都長安の東南隅、曲江池一带（以下「曲江」と称す）は周知の通り長安有数の行楽地であつたが、安史の乱（七五五〜七六三年）によつて一度は荒廢する。時代は下り九世紀、文宗の治世には復興が企てられるものの、今度は甘露の変（八三五年）の煽りを受け復興は沙汰止みとなり、往年の榮華を取り戻す機会は永遠に失われる事となつた。李商隱の七言律詩「曲江」にはこうした歴史的事実が背景にある。

しかし具体的にいかなる史実が詠じられているかについては見解に分岐がある。例えば朱鶴齡は玄宗と楊貴妃がかつて曲江へ行幸した史実と甘露の変とを併せて詠じたものとし、馮浩は文宗の妃である楊賢妃の死を悼んで詠じたものとする一方、張采田の説に拠れば専ら玄宗と楊貴妃の事

のみを詠じた詩と見なされる^①。本論の主眼である、詩の末句に用いられた「傷春」という語についても、そうした見解の分岐に対応してそれぞれ唐王室への憂慮を示すもの、楊賢妃の死を悼むもの、はたまた楊貴妃の死を悼むもの、と解釈されるに至る。史実との照合はさておき、焦点を「傷春」の語に絞つてみれば、昨今では甘露の変に觸発され、また杜甫「哀江頭」から着想を得た上で、衰えゆく唐王朝の命運を憂えた語とする解釈も見られるようになる^②。

こうして「傷春」の解釈を巡り定論が見出せない中、近年下定雅弘氏によつて従来とは全く異なる新たな「傷春」解釈が提示された。本論はこの下定氏による新解釈を端緒に、李商隱が用いる「傷春」という詩語について、氏とは別の角度から検討を加えその意味を明らかにする事を目的とした^③。

一 下定氏の新解釈

本節では下定雅弘氏の新解釈を紹介するが、それに先立ち李商隱「曲江」詩を以下に示す。

望斷平時翠輦過 望斷す 平時 翠輦の過ぎりしを
空聞子夜鬼悲歌 空しく聞く 子夜 鬼の悲歌するを
金輿不返傾城色 金輿返らず 傾城の色
玉殿猶分下苑波 玉殿猶お分かつ 下苑の波
死憶華亭聞唳鶴 死せんとして憶う 華亭に唳鶴を聞
くを

老憂王室泣銅駝 老いては王室を憂い 銅駝に泣く
天荒地變心雖折 天荒地變じ 心折ると雖も
若比傷春意未多 若し傷春に比ぶれば 意未だ多から
ず

後述する通り、この「曲江」詩は開成元（八三六）年の作と考えられている。以下詩の大意についても示す事とする。
平穩な時代に見られた、天子の御車（翠輦）が曲江を訪れる光景は今や途絶え、ここ曲江では死者の悲しい歌声が聞こえるばかり（首聯）。黄金の輿に乗る傾城の美女もすでに二度と戻らぬ過去の話となったが、天子のいます宮殿（玉殿）には今もなお曲江（下苑）から水が流れ込んでいる（頷聯）。かつて晋の陸機は処刑されるに際し、故郷の

華亭で飼っていた鶴の声を聞きたいと思い、晋の滅亡を予感していた索靖は都洛陽の宮門の前に立つ銅製の駱駝を指さして、いつか荆の茂る中にお前の姿を見る事となるだろうと、涙ながらに語った（頸聯）。天変地異に比すべき惨劇を目の当たりにして心挫ける思いを抱かぬ者はいないが、それでも私の抱く「傷春」の思いに比べれば、まだどれほどのものでもないのだ（尾聯）。

第八句目に見える「傷春」の語が一体何を指すのかについては、先に触れた通りその解釈に分岐がある。そうした分岐を踏まえた上で下定氏は、「傷春」を次のように解釈する。

六句までについてのさまざまな読み方は、どれもが商隱の脳裏にあり、あるいはよぎったものであるかも知れない。だが七・八句の意味は、私の見る所、一つであり、実に明瞭である。

七・八句「天荒地變心雖折」は上の六句を全部受けている。「この天荒地變する惨劇に、人々の心はくじけ肝もつぶれた、だがその悲痛な思いも、「傷春」即ち自らの生命を燃やすことかなわぬ私の悲しみと悶えに比べれば、それはまだ知れたものなのだ」。

従来解釈においては、それが楊貴妃の死であれ唐王朝の命運であれ、「傷春」が全て外在する要因に触発された感

情として捉えられて来たのに対し、下定氏は「傷春」を、詩人自身の悲しみや悶えといった内在的感情として捉えている。その点においてこの新解釈は従来の解釈と鋭く対立する。

こうした解釈の妥当性を検証する上で最も有効的な方法は、「曲江」詩以外の李商隱詩における「傷春」の用例について調べる事であると下定氏は述べ、「曲江」詩を除く全六例についても考察を加えている。⁽⁵⁾ 紙幅の都合上、その全てを取り上げる事は避けねばならないが、ここでは一例のみ、「悩みを韓同年に寄す二首（寄惱韓同年二首）」の二首目を示す。

龍山晴雪鳳樓霞 龍山の晴雪 鳳樓の霞

洞裏迷人有幾家 洞裏の迷人 幾家か有る

我為傷春心自醉 我は傷春の為に心自ら酔いて

不勞君勸石榴花 勞せず 君が石榴花を勧むるを

詩題に見える「韓同年」とは韓瞻を指す。李商隱と同年の進士であり、また李商隱同様王茂元の娘を娶っているが、その結婚は李商隱に先んずるものであった。そうした韓瞻に対する抑えがたい羨望に悩まされる心情を詠じたのがこの詩であるが、三・四句目について下定氏は次のように述べる。

三・四句、私はもうとつくに「傷春」の思いで内心酔っ

ている、君に石榴酒を飲めと勧めていただく必要はない。この「傷春」は、韓が結婚して幸福な日々を送っているのを羨み、自分は相手もなく（情熱をそそぐ対象も無く）無聊の日々を過ごしている懊悩である。⁽⁶⁾

表現の違いこそあれ、氏は李商隱の用いる「傷春」を、自己の願望を充足できない事への悶えや悲哀として解釈するのであり、かつそれは「傷春」の用例全てに共通するものとして「傷春」を統一的に解釈しようとするのがそのスタンスである。こうした考察を重ねた上で下定氏は再度「曲江」詩に立ち戻り、次のような結論を下す。

「曲江」にもどろう。「曲江」の「傷春」も同じ意味で用いられている。李商隱は、「天荒地変」の惨劇を見つめている。これを逆に見れば、商隱は「心折」の側にはいない。もし商隱自身の心も折れてしまうのであれば、それは時代の現実とのコンタクトを果たしている。だが商隱はこの惨劇の外に在る。この惨劇の中の人として、自己の生命を燃焼させることができない。商隱は、これを「傷春」といつているのである。⁽⁷⁾

以上下定氏によって提示された新解釈について紹介してきた。以下の節では氏の解釈の妥当性の検証を含めつつ、氏とは異なる角度から李商隱の用いる「傷春」の意義について考察を行いたい。

二 唐詩に見える「傷春」

本節ではそもそも「傷春」が唐詩においてどのような用いられて来たのかについて確認したい。「傷春」が詩語として熟するのは南朝梁の時代まで待たねばならず、しかもその用例は管見の限りではわずかに三例のみである。一方、『寒泉』古典文献全文検索資料庫などを用いて『全唐詩』を調査すると、唐代に至り「傷春」の用例数は飛躍的に増大するのが確認され、その用いられ方は概ね以下の五つのパターンに大別できる。

①春と感傷

今試みに『漢語大詞典』を繙くと、「傷春」の語釈には「春の到来によって憂愁や苦悶が引き起こされる事（因春天到来而引起忧伤、苦悶）」とある。これを現代人である我々の「傷春」に対する最大公約的な理解であるとすれば、それに最も近いと思われるのが、この第一パターンであると考えられる。

日日河邊見水流　　日々河辺に水流を見る
傷春未已復悲秋　　傷春未だ已まざるに　復た秋を悲しむ

山中舊宅無人住　　山中の旧宅　人の住む無く

來往風塵共白頭　　風塵に來往すれば　共に白頭

（戴叔倫「贈殷御史亮」詩）

即是春風盡　　即すなは是れ　春風尽くるとも

仍霑夜雨歸　　仍またお夜雨に霑ぬいて帰らん

明朝更來此　　明朝　更に此に來たらば

兼恐落花稀　　兼またねて恐る　落花の稀なるを

（李昌符「傷春」詩『全唐詩』卷六〇一）

戴叔倫詩の一句目に見える河の流れは止めどなく過ぎゆく時間の経過を象徴するものである。⁹⁾三・四句目では山中の幽棲の地は打ち捨てられたまま、世俗の雑事にまみれ白髪となり年老いていく戴叔倫と殷亮の嘆きが詠じられる。時間の経過の無情さと、それに伴う肉体的衰えへの悲しみを一層引き立てるものとして「傷春」は用いられているようである。

続く李昌符詩は詩題そのものが「傷春」である。明朝になれば花も散ってしまうであろうから、春風が尽き春は終わったとしても、夜の雨に濡れるに任せてなお花を愛でたいと詠じるこの詩からは、散る花と共に去りゆく春への哀惜を読み取るのは困難ではない。

しかし予想に反して、このような用いられ方は意外な程少なく、唐詩における「傷春」は、以下に示す通り何らか

の感情を媒介として湧き起こるものとして詠じられる例が大多数を占めているのである。

②送別・留別・望郷

暮節看已謝 暮節 看みす已に謝り

茲晨愈可惜 茲の晨 愈いよ惜しむべし

風澹意傷春 風澹かにして 意 春を傷み

池寒花歛夕 池寒くして 花 夕べに歛まる

對酒始依依 酒に對して 始めて依依

懷人還的的 人を懷いて 還的的

誰當曲水行 誰か曲水の行に当たりて

相思尋舊跡 相思いて 旧跡を尋ねん

(韋應物「三月三日寄諸弟兼懷崔都水」詩)

追錢同舟日 追錢 同舟の日

傷春一水間 傷春 一水の間

飄零爲客久 飄零 客と為ること久しく

衰老羨君還 衰老 君が還るを羨む

(杜甫「涪江泛舟送韋班歸京」詩 一、四句目)

まず韋応物詩であるが、これは韋応物が滁州刺史であった頃の作とされる。遠く離れた長安にいる兄弟や旧友が、曲江を散策しつつかつて私と遊覧した事を思い起こしてくれ

るだろうか、と結ばれるこの詩に見える「傷春」は過ぎ行く春への単なる感傷ではなく、長安での日々を懷かしむ感情によって引き起こされたものと考えられる。

次いで挙げた杜甫詩は長安への帰途に着く知人を送る際に作られたものであるが、杜甫は「飄零 客と為ること久しく、衰老 君が還るを羨む」と、長く異郷をさすらい帰京を果たせぬまま老い行く自らの姿を詠じつつ、望郷の念を表明する。そうした杜甫の目に映る麗らかな春の景物は慰めになるどころか、かえって寂寥感を増すばかりであり、それを「傷春」と表現するものであろう。

③屈原への連想

そもそも「傷春」は、『楚辞』招魂の乱辞に見える「目は千里を極めて春心を傷ましむ(目極千里兮傷春心)」を典故とするとされる。第三のパターンはこれを典故としつつ屈原への連想をも含めて「傷春」を用いる例である。

正當楚客傷春地 正當に楚客 傷春の地

豈是騷人道別時 豈に是れ騷人 別れを道う時ならん

や

(獨孤及「答皇甫十六侍御北歸留別作」詩 一・二句目)

『全唐詩』卷二四七

青楓江色晚 青楓 江色晚れ

楚客獨傷春 楚客 独り春を傷む

共對一尊酒 共に對す 一尊の酒

相看萬里人 相看る 万里の人

猜嫌成謫宦 猜嫌 謫宦と成り

正直不防身 正直 身を防がず

莫畏炎方久 畏るる莫れ 炎方久しきも

年年雨露新 年年 雨露新たなり

（司空曙「送鄭明府貶嶺南」詩）

独狐及詩の一句目に見える「楚客」は、古の楚の地に客寓する人を指すと同時に、屈原そのものを指す語としても用いられる詩語である。独狐及は北方への帰路に就く皇甫曾（皇甫十六侍御）を見送るに際し、今彼らが身を寄せている南方の地（楚）に関連する典故であり、また皇甫曾がそもそも左遷されて南方へとやって来た事を暗示するために「招魂」の乱辞を踏まえた表現を用いていると考えられる。

続く司空曙詩では、嶺南の地に放逐される鄭明府なる人物に贈られた送別詩であるが、五・六句目で「猜嫌 謫宦」と成り、正直 身を防がず」と、鄭明府の貶謫の理由が己の正義を貫かんとして却って有らぬ嫌疑を掛けられた末のものであると明示される。ここに讒言を蒙り都を追われた屈原の悲劇を重ね合わせる事は難くない。独り春を傷む「楚

客」とはかつての屈原であり、また流竄の身となった鄭明府自身の姿でもある。

④下第による失意

よく知られている通り、春は放榜、科擧の合格発表の季節でもある。かの孟郊「登科後」詩などは、百花繚乱の都長安の春景色を背景に、長く辛い受験生活を終えた解放感と、榮譽を手にし胸躍る高揚感を詠じた詩として名高いものである。

昔日齷齪不足誇 昔日の齷齪 誇るに足らず

今朝放蕩思無涯 今朝放蕩 思い涯無し

春風得意馬蹄疾 春風 意を得て 馬蹄疾く

一日看盡長安花 一日看尽くす 長安の花

（孟郊「登科後」詩）

これとは対照的に、下第により志を果たすこと叶わなかった詩人の目には、華やぐ春の光景は失意を一層深め、己が身の惨めさを痛感させるものとして映ったはずであり、そうした失意や落胆を表明する詩語として「傷春」は定着していった。

遊客盡傷春色老 遊客尽く傷む 春色の老いるを

貧居還惜暮陰移 貧居還た惜しむ 暮陰の移るを

（司空曙「下第日書情寄上叔父」詩 一・二句目）

天涯長戀親 天涯 長く親を恋い

闕下獨傷春 闕下 独り春を傷む

(李頻「送友人下第歸宛陵」詩 一・二句目)

『全唐詩』卷五八七)

我が世の春を謳歌する人々をよそに、都長安で失意の時を送らねばならぬ悲しさが、「傷春」の語に凝縮されているのが見て取れよう。こうした「傷春」の用例は、科挙制度が整備され本格的運用を見た唐という時代の産物とも考えられ、注目に値する。

⑤ 国政への憂慮

最後に第五のパターンであるが、国政への憂慮を示すものとしての「傷春」である。これは直接的には杜甫の「傷春五首」を濫觴とするものと考えられる。

天下兵雖滿 天下 兵満つと雖も

春光日自濃 春光 日び自ら濃やかなり

西京疲百戰 西京 百戦に疲れ

北闕任羣兇 北闕 群凶に任す

關塞三千里 關塞 三千里

烟花一萬重 烟花 一万重

蒙塵清路急 蒙塵 清路急なるも

御宿且誰供 御宿 且つ誰か供せん

殷復前王道 殷は復す 前王の道

周遷舊國容 周は遷す 旧国の容

蓬萊足雲氣 蓬萊 雲氣足りて

應合總從龍 應合に総て竜に従うべし

(「傷春五首」其一)

詩題下の原注に「巴閬は僻遠にして、春を傷むこと罷みて始めて春前已に宮闕を収むるを知る(巴閬僻遠、傷春罷始知春前已収宮闕)」とあり、「宮闕を収むる」とは広徳元(七六三)年、吐蕃の侵攻により都長安が陥落したものの、同十二月には長安を奪還した事実を指す。今五首連作のうち一首目のみを挙げたが、このように連作の形で唐王朝の不安定な現状を示しつつ、そうした現状の打破と秩序の回復を願ひ献策を試みることは杜甫の得意とする所であった。

さて、杜甫「傷春五首」其一ではすでに一・二句目で「天下 兵満つと雖も、春光日び自ら濃やかなり」と、国家の危機とそれとはまるで無関係な春景色とが対比されているが、杜甫の「傷春」は単なる感傷的な気分ではなく、唐王朝の将来を憂えるが故に、眼前の春景色を愛でる気になどとてもなれない、という憂国の情を強く投影した詩語である。

三・四句目「西京 百戦に疲れ、北闕 群凶に任す」では、

度重なる戦乱に疲弊し、また異民族の蹂躪に任せる都長安の惨状が詠じられ、杜甫の時局に対する憂慮の深刻さがのぞく。しかし杜甫のいる閬州は長安からはるか三千里の距離であり、けぶるが如く無数に咲き誇る花も、視界を遮り却って長安との隔たりを痛感させるものとして詠じられているようでもある（関塞 三千里、煙花 一万重）。やはり春の景物は慰めではなく傷心を深めるものなのである。

こうして杜甫によって新たな意味を付与された「傷春」は、孟郊の「傷春」詩、于湊の「戍卒傷春」詩（『全唐詩』卷五九九）、子蘭の「長安傷春」詩（『全唐詩』卷八二四）などに継承されていく。また詩題ではなく詩中において、同様の発想で「傷春」が用いられている例も存在する。杜甫とほぼ同時代の、李嘉祐の詩がそれである。

遠岫依依如送客 遠岫依依として 客を送るが如く
平田渺渺獨傷春 平田渺渺として 独り春を傷む
那堪回首長洲苑 那んぞ堪えん 首を長洲苑に回らす
に

烽火年年報虜塵 烽火年年 虜塵を報ずるを

（李嘉祐「自蘇臺至望亭驛人家盡空春物增思悵然有作
因寄從弟紆」詩 五／八句目 『全唐詩』卷二〇七）
以上唐詩に見える「傷春」について、五種類のパターンに大別し概観してきた。これらを踏まえた上で、李商隱「曲

江」詩に用いられた「傷春」の意義について考えてみたい。

三 「曲江」という場

ここでは李商隱「曲江」詩の舞台となった曲江という場の持つ意味合いについて検討する。すでに述べた通り、都長安の東南隅、曲江池一帯は長安きつての行楽の地であった。同時に、天子が百官に宴席を賜るという国家的セレモニーの場としての性格も有しており、当時の盛行振りは例えば『劇談録』などにも記される通りである¹³⁾。その中でもいわゆる「曲江の宴」は、春真つ盛りの中栄光を手にした科挙合格者を祝う一大イベントであり、その宴に際し将来の婿を求めんとする公卿百官の乗る車馬で埋め尽くされた事を、『唐摭言』の記述は伝えている。ここに敢えて付け加えるならば、唐代の曲江は立身出世や将来の栄達などへの連想が働く、いわば「名利の場」としての性格も有していた、といえよう。

一方、詩歌に歌われる詩跡としての「曲江」を後世に強烈に印象付けたのは、杜甫の「哀江頭」であろう。

少陵野老吞聲哭 少陵の野老 声を吞んで哭す
春日潛行曲江曲 春日潜行す 曲江の曲
江頭宮殿鎖千門 江頭の宮殿 千門を鎖し

細柳新蒲爲誰緑 細柳新蒲 誰が為に緑なる
 憶昔霓旌下南苑 憶う昔 霓旌南苑に下り
 苑中萬物生顔色 苑中の万物 顔色を生ず
 昭陽殿裏第一人 昭陽殿裏 第一の人
 同輦隨君侍君側 輦を同じくし君に隨い君側に侍す
 (以下四句省略)

明眸皓齒今何在 明眸皓齒 今何くにか在る
 血汚遊魂歸不得 血は遊魂を汚し 歸り得ず
 清渭東流劍閣深 清渭東流し 劍閣深く
 去住彼此無消息 去住彼此 消息無し

人生有情淚沾臆 人生情有らば 涙 臆を沾さん
 江草江花豈終極 江草江花 豈に終極あらんや
 黃昏胡騎塵滿城 黃昏胡騎 塵は城に滿ち
 欲往城南望城北 城南に往かんと欲して城北を望む

(杜甫「哀江頭」)

安史の乱の最中、賊軍に囚われの身であった杜甫が、曲江を訪れかつての栄華を思い起こし涙するというこの「哀江頭」により、曲江は唐王朝の繁栄と没落を示す象徴ともなったのである。

これに加えて注目すべきは、『旧唐書』卷十七下、文宗紀下に見える、「哀江頭」を愛誦した文宗が曲江の復興を決意するという記載である。この記載は少なくとも文宗の

治世、すなわち李商隱の在世時には「哀江頭」が人口に膾炙していた事実を伝えているようにも思われる。李商隱「曲江」詩が「哀江頭」から着想を得ているという指摘がある事はすでに触れた通りである。今試みに両詩から類似する句を摘出すると以下になる。

①曲江への天子の行幸を詠じる句

「憶う昔 霓旌南苑に下り、苑中の万物 顔色を生ず」

(「哀江頭」)

「望断す 平時 翠輦の過ぎりしを」

(「曲江」詩)

②天子の傍らに侍る美女の死を詠じる句

「明眸皓齒 今何くにか在る、血は遊魂を汚し 歸り得ず」

(「哀江頭」)

「金輿返らず 傾城の色」

(「曲江」詩)

③現世の移り変わりとは対照的な、不変の情景を詠じる句

「細柳新蒲 誰が為に緑なる」

「江草江花 豈に終極あらんや」

(「哀江頭」)

「玉殿猶お分かつ 下苑の波」

（曲江）詩

詩の舞台となる共通の場（曲江）、作詩の背景にある動乱（安史の乱と甘露の変）、これらに以上のような詩句の構成を加味すれば、両詩には形式上の差異を超えて一定の類似性が認められる。「曲江」詩が「哀江頭」の影響下に作られたことはほぼ間違いないであろう。

さて、李商隱自身が曲江を詠じた作品は、「曲江」詩を含め計五首現存しているが、本節ではその中の一篇「病中早に招国の李十將軍を訪ねしも、家を挈れて曲江に遊ぶに遇う（病中早訪招国李十將軍遇挈家遊曲江）」詩二首を取り上げてみたい。

十頃平波溢岸清 十頃の平波 岸に溢れて清し
病來唯夢此中行 病んで来^{このかた} 唯だ夢む 此中^{ここ}に行く

相如未是真消渴 相如は未だ是れ 真の消渴にあらず
猶放沱江過錦城 猶お沱江の錦城を過ぎるに放す^{まが}

（二首目）

家近紅蕖曲水濱 家は近し 紅蕖曲水の濱
全家羅襪起秋塵 全家の羅襪 秋塵を起こす
莫將越客千絲網 越客千絲の網を將って
網得西施別贈人 西施を網し得て 別に人に贈る莫れ

（二首目）

一首目では、病床にあつた李商隱は曲江を遊覽する事をひたすら願っていたが、それに比すれば沱江の水を飲み尽くす事も出来なかつた司馬相如など本場に「消渴」を患っていたなどいえるようか、と詠じられる。詩人の「渴望」と、司馬相如の「消渴」の病とを対比するこの大仰なレトリックが何を意図して用いられているのか、少なくとも一首目のみを見ていても詳らかにするのは困難である。

しかしこの一首目と合わせ二首連作を構成していたと考えられる二首目を見れば、その寓意は明らかとなる。¹⁵ せっかく網で引き上げた西施の如き美女を他人に嫁がせるような事はなさいますな、と後半で詠じるこの二首目について詹滿江氏は次のように述べる。¹⁶

李商隱は、李十將軍のもとにいるある女性を所望していたのである。その女性は後に娶ることとなった王茂元の娘だとする説もあるが、確かではない。李商隱はさる女性をわがものにしたと渴望するあまり、第一首であんなにも大仰な表現をしたのである。

一首目で表明された詩人の渴望が、単に曲江への遊覽のみを指すのではなく、さる女性との婚姻を指すものであったとする詹氏の指摘は正鵠を得たものである。これに加えて、本論で特に注目したいのは、そうした渴望が曲江と絡めて表現されている点と、李十將軍の不在の理由（曲江へ出か

けていた事)を取って詩題に明示している点の二点である。本節の最初に触れたとおり、曲江は貴顕の立場にある者が官僚候補生たる科擧合格者たちの中から婿を求める場でもあった。当然ここから婚姻を通じての将来の栄達の保証という連想が生まれると考えられる。李商隠が李十將軍に贈ったこの詩もまた、そうした共通理解が李十將軍との間にあった事を前提として作られたものであり、ここから李商隠の曲江を「名利の場」としてみなそうとする意識の存在が確認されよう。

四 「流鶯」に託された寓意

李商隠にとって「名利の場」としての側面を持ち合わせていたと考えられる曲江、その曲江を詠じた詩に用いられた「傷春」の意義を考える上で示唆する所があると思われるのが、「流鶯」詩である。

流鶯漂蕩復參差 流鶯漂蕩 復た參差

渡陌臨流不自持 陌を渡り流れに臨むも 自ら持せず

巧囀豈能無本意 巧囀 豈に能く本意無からんや

良辰未必有佳期 良辰 未だ必ずしも佳期有らず

風朝露夜陰晴裏 風朝露夜 陰晴の裏

萬戸千門開閉時 萬戸千門 開閉の時

曾苦傷春不忍聽 曾て傷春に苦しみ 聴くに忍びず
鳳城何處有花枝 鳳城何れの処にか 花枝有らん

ここで詠じられるのは、美しい囀りに本心を託し訴えかけるが、仮に良い時に恵まれたとしても良き出会いには恵まれない(巧囀 豈に能く本意無からんや、良辰 未だ必ずしも佳期有らず)、身を寄せる枝も見つからぬまま都長安をあてどなくさすらう(鳳城何れの処にか 花枝有らん)鶯の姿である。こうした鶯の詠じられ方自体、唐詩においては例外的なものと考えられるが、そうした鶯の姿に詩人自らの不遇を仮託して詠じたとする解釈が生じるのも、あながち無理な事とはいえない¹⁷⁾。また鶯の伝統的なイメージが「乖離や」「巧囀(美しい囀り)」と「傷春」との齟齬などを指摘した上で、李商隠の詠物詩の中では風格が劣るものであると評する向きもあるが、本節ではそうした乖離に着目し、そこに託された寓意について検討してみたい。

さて、進士に及第する事を「遷鶯」と称する習慣が唐代に存在した事については、同じく唐代の史料である『劉賓客嘉話』にもすでに見える所ではある。¹⁸⁾「遷鶯(もしくは鶯遷)」は詩語として唐詩に散見されるが、李商隠自身もそうした意味合いでこれを用いる詩が三首確認される。

朝滿遷鶯侶 朝には満つ 遷鶯の侶

門多吐鳳才 門には多し 吐鳳の才

〔喜舍弟義叟及第上禮部魏公〕詩 五・六句目

舊居連上苑 旧居 上苑に連なり

時節正遷鶯 時節 正に遷鶯

〔思歸〕詩 七・八句目

悔逐遷鶯伴 遷鶯の伴を逐うを悔い

誰觀擇虱時 誰か虱を択ぶ時を觀ん

〔詠懷寄祕閣舊僚二十六韻〕詩 四十一・四十二句目

また、出世を果たし今をときめく旧友を「鶯友」と称する例も存在する。

若向南臺見鶯友 若し南台にて鶯友に見わば

為傳垂翅度春風 為に伝えよ 翅を垂れて春風を度る

と

〔喜聞太原同院崔侍御臺拜兼寄在臺三二同年之什〕詩

七・八句目

こうした事実を踏まえれば、「流鶯」詩は立身出世の象徴としての鶯のイメージを敢えて意図的に反転させ、科挙及第を果たせぬ自らの不遇をそこに託した詩である、とも解釈できるように思われる。そこに用いられた「傷春」の語もまた、第二節で取り上げた唐詩における「傷春」の用例のうち第四のパターンである、下第による失意を表すパターンをイメージの核として用いているとも考えられよう。

ここで「流鶯」詩と照らし合わせる形で「曲江」詩に立ち戻ってみると、李商隱にとつても名利を意識せざるを得ない場であった曲江と「傷春」が結合する際、そこに科挙下第への失意が介在する事は避けられなかったと思われる。下定氏の述べるところの「自らの生命を燃やすこと叶わぬ悲しみと悶え」とは、直接的には下第という体験を下敷きにしたものとして捉えられないだろうか。

事実、劉学鍔氏の編年に拠ればこの「曲江」詩は開成元年の作であり、これは李商隱の進士科及第の前年にあたる。またこの開成元年という年は、李商隱が彼の政治批判詩の傑作とされる「有感二首」や「重有感」詩などを集中的に作成していた年でもあり、彼の国政に対する関心がその生涯の中でピークに達していた時期と考えられるのである。

このように詩の作成時期、唐王朝の榮枯盛衰を映す場としての曲江、そして何よりも李商隱が強く念頭に置いていたであろう杜甫「哀江頭」の影響を考え合わせるに、「傷春」の語から国政への憂慮としての意味合いを消し去る事も困難なように思われる。むしろ国家の命運を案じる心情を託す「傷春」に、個人的な挫折体験に由来する失意を示す「傷春」の意を滑り込ませる事で、「曲江」詩に用いられた「傷春」は二重の意味を兼ねるようになったのであり、それが李商隱が「曲江」詩末句において意図したものではな

いだろうか。前述の下定氏の解釈が成立したとしても、少なくとも「曲江」詩については、「傷春」の意味をそれ一つのみに限定する事は困難ではないか、と筆者は考える。

五 「杜司勳」詩の「傷春」

最後に、李商隱が用いる「傷春」の多義性を示す一例として、「杜司勳」詩を取り上げ若干の考察を行いたい。

高樓風雨感斯文 高樓の風雨 ス文に感ず

短翼差池不及羣 短翼差池として 群するに及ばず

刻意傷春復傷別 刻意傷春 復た傷別

人間惟有杜司勳 人間惟だ有り 杜司勳

杜司勳すなわち杜牧へ贈られたこの詩では、才能に恵まれていても官界では思うに任せず出世レースでは後れをとらざるを得ない杜牧の不遇への同情を詠じる（短翼差池として 群するに及ばず）。そのような境遇にあっても、文学作品に「傷春」や「傷別」の思いを託す事に精魂を傾ける事ができるのはこの世で杜牧ただ一人である、と文学面での成就への賞賛も呈する（刻意傷春 復た傷別、人間唯だ有り 杜司勳）。

三句目に見える「傷春」については、従来の解釈では具体的な作品を指すとする解釈、官僚としてのキャリアへの

不遇感を表明するとする解釈、また憂国の情を示すものとしての解釈といった具合に分岐が存在していた。⁽²⁰⁾なお「杜司勳」詩の「傷春」についての下定氏の解釈は以下の通りである。⁽²¹⁾

この詩の「傷春」は杜牧の作品を意識する。それが何を意味するのかは、以上五首の「傷春」の例よりも把握しがたい。だが、この詩は杜牧への深い共感をもつて詠じられており、商隱自身の境遇と創作への感慨と重なっていることは疑いない（中略）この「傷春」も、志を実現する場を得ない悲しみを核とする所の、命燃やすことかなわぬ己の身世への悶えである。

「曲江」詩の「傷春」の解釈（自らの生命を燃やすことかなわぬ私の悲しみと悶え）が、この「杜司勳」詩についてもほぼ当てはまると下定氏は考えるようである。

さて、李商隱にはもう一首、杜牧に贈った詩がある。「贈司勳杜十三員外（司勳杜十三員外に贈る）」詩がそれである。

杜牧司勳字牧之 杜牧司勳 字は牧之

清秋一首杜秋詩 清秋一首 杜秋の詩

前身應是梁江總 前身 応に是れ 梁の江総なるべく

名總還曾字總持 名は総還た曾て 字は総持

心鐵已從干鎔利 心鉄已に従う 干鎔の利

鬢絲休歎雪霜垂 鬢絲嘆くを休めよ 雪霜の垂るるを

漢江遠弔西江水 漢江 遠く弔う 西江の水

羊祜韋丹盡有碑 羊祜韋丹 尽く碑有り

三・四句目では杜牧の字が「牧」之であつた事から、同様に本名と字で一文共有する梁の江総（字は総持）こそその前身であろう、と諧謔的なレトリックを用いている。

一方で七・八句目では杜牧が韋丹のために撰した「唐故江西觀察使武陽公韋公遺愛碑」は、晋の杜預が羊祜のために撰した「墮淚碑」に比肩すべき千古の名文であると絶賛する。これも当然杜預と杜牧が同姓である事からの連想も働いていようが、三・四句目と合わせて読めば杜牧の文才を、具体的な作品を挙げつつ讃えているのは明白である。

以上を踏まえつつ、本論で特に注目したいのは五句目「心鉄已に従う 干鏌の利」である。この句について馮浩は次のように注する。²⁶

舊書、武宗朝誅昆夷、鮮卑。牧上宰相書、言戎胡入寇、在秋冬之間、盛夏無備。宜五月中擊胡爲便。李德裕稱之。注孫武十三篇行於代。：句所謂心鐵利也。

旧書に、武宗朝に昆夷、鮮卑を誅す。牧 宰相に書を上り、言うならく戎胡入寇するは、秋冬の間に在りて、盛夏は備え無し。宜しく五月中に胡を撃つを便と爲すべし、と。李德裕之を称す。孫武十三篇に注し代に行わる：句謂う所の心鉄の利なり。

馮浩は『舊唐書』を引用し、この五句目が異民族征伐という時局に関する確かな上奏や、『孫子』の注釈などに表れている軍事面での才能を指すと解釈し、劉學鍇氏もこれを敷衍した解釈を示す。²⁶ この解釈に従えば、「司勳杜十三員外に贈る」詩は先に触れたような杜牧の文学面での成就と、政治上の実務への見識の高さの双方を評価している事となる。こうした両方面からの評価の図式は、「杜司勳」詩にも当てはまりはしないだろうか。

無論「傷春」は実務能力とは別次元の、純粹な文学作品への評語であるが、ここでは杜甫「傷春五首」に端を発する、国政への憂慮を示す語として用い、「傷春」に代表されるような憂国の詩篇と、「傷別」に代表される感傷的な作品という両面からの評価を試みたとも考えられるのである。

こうした評価の在り方を示す傍証と考えられるのが、杜牧と同時代の詩人である崔道融が杜牧の作品集を読んだ感慨を詠じた「杜紫微集を読む（讀杜紫微集）」詩（『全唐詩』卷七一四）である。

紫微才調復知兵 紫微は才調 復た兵を知る
長覺風雷筆下生 長に覺ゆ 風雷 筆下に生ずるを
還有枉拋心力處 還た枉げて心力を抛つ処有りて
多於五柳賦閒情 五柳 閑情を賦すよりも多し

崔道融は一句目で杜牧の文才（才調）と軍事的才能（復た兵を知る）双方への賞賛を呈する。二句目で杜牧がひとたび筆を走らせればそこに風や雷が生じるような気がすると詠じるのは、杜牧の作品から滲み出る剛毅な性格と、作品の持つ強靱な生命力を指しているのであろう。こうした評価はまさしく李商隱が詩中で試みた杜牧への評価と重なるものである。

詩の後半では一転、杜牧が心力を注ぐべき対象を艶情的な作品に移した時は、五柳先生こと陶淵明が作った「閑情賦」以上の出来栄である、とも詠じている。これは杜牧の横溢する才能が生み出す作品群の幅の広さを示すものとも読めるし、また杜牧がその才能を発揮する場を得る事が出来ないからこそ不本意ながら艶麗な作品も生まれざるを得ないのだ、とその境遇への同情も込められているようである。これは李商隱が「杜司勳」詩で「短翼差池として群するに及ばず」と杜牧の政治的不遇を理解しつつ、その上で文学作品への賛辞を惜しまない姿勢に通底する所があるようにも思われる。

以上「杜司勳」詩に表れた「傷春」の意義について、同時代人から見た杜牧への評価という観点から検討してきた。仮に下定氏のように「傷春」を、志を実現しえない悲しみや悶えのみに限定して解釈すれば、上述のような同時

代人からの評価を見落とす事となると考えられる。

おわりに

本論での考察を締めくくるに当たり、若干のまとめをしておきたい。

本論の端緒となったのは下定雅弘氏によつて提示された、従来とは全く異なる「傷春」の語の解釈であった。歴史的事実との照合から離れ、作品そのものに即す形で導き出された解釈について、筆者はその妥当性に疑義を呈するものではない。ただ筆者が疑問を感じざるを得なかったのは、「傷春」の用例全てを、作者が同じであればその用いられ方も統一的に解釈しようとする下定氏のスタンスであった。「同年の李定言と曲水に閑話し戯れに作る（與同年李定言曲水閑話戯作）」詩の「傷春」について、下定氏は以下のようにコメントする。²⁴

『集解』（筆者注・劉學鍇・余恕誠『李商隱詩歌集解』を指す）はこの詩の「傷春」について、「曲江」の「時を傷み乱に感ずる傷春とは顯然として同じからず、男女の情に属し政治に関わること無し」という。「傷春」の意はさておき、同じ語が、一人の作者において、それほどまでに異なる用いられ方をするだろうか？

しかし本論の第三節に示した通り、唐詩に用いられる「傷春」は、それを用いる詩人の関心のありように応じ様々なバリエーションをもって用いられてきた。また同節で挙げた杜甫や司空曙の詩は、たとえ同一の詩人であってもその作品ごとに「傷春」の指し示す内容に差異が存在する事を示している。李商隱のみを例外としてそこから排除するのは困難であるし、仮にそうだとすれば何よりもまずその論拠が示されるべきであろう。

唐詩における「傷春」の系譜の中にあつて李商隱はいかなる取捨選択をしてきたのか、また従来とは異なる独自の表現を試みたのか否かを探ろうとするのは本論の目的の一つでもあった。その意味では、解釈の妥当性はさておき李商隱の「傷春」に様々なバリエーションの存在を認める黄世中氏のようなスタンスに、筆者のスタンスもより近いといえるかもしれない。⁽²⁵⁾ただし一首の詩の中の「傷春」に一つの意味のみが付与されるのではなく、時に複数の意味が重なる事もあり、その例が本論の考察の中心となった「曲江」詩ではなかったかと考える。

李商隱に先立つ事およそ七十年、曲江を訪れ「哀江頭」を詠じた杜甫は、二度と還らぬ華やかなりし日々を思い涙した。また詩の末聯「黄昏胡騎 塵は城に満ち、城南に往かんと欲して城北を望む（黄昏胡騎塵滿城 欲往城南望城

北）」では黄昏時に異民族の騎兵の捲き起こす砂埃に唐王朝の暗澹たる未来を象徴させ、そこに不安を抱く主体としての詩人杜甫の姿を、一句目で「少陵の野老」と自称する事で取えて詩に登場させてもいた。

一方李商隱は「曲江」詩を「若し傷春と比ぶれば 意未だ多からじ」と結ぶ。これは一つには甘露の変という政治的混乱を経て、復興の機会を永遠に失った曲江を眼前に湧き上がるのを抑えられない憂国の情を示す。しかし李商隱はそこに、名利を象徴する場としての曲江と、そうした名利の場、換言すれば科擧及第を果たせず政治の場から疎外された自己の不遇感をもまた「傷春」の語に込めて詠じたのではないだろうか。「曲江」詩の末句「若し傷春と比ぶれば 意未だ多からじ」は、杜甫とは異なる形で直面する時代の危機と詩人自らを対峙させる表現であり、そこから生まれる只ならぬ緊張関係もまた李商隱の意図する所ではなかったか、と考える次第である。

紙幅の都合上、本論では「曲江」詩、「流鶯」詩、そして「杜司勳」詩に見える「傷春」のみを取り上げて考察してきた。残りの「傷春」の用例については、稿を改めて論じる事としたい。

注

- (1) 此詩前四句追感玄宗與貴妃臨幸時事、後四句則言王涯等被禍、憂在王室而不勝天荒地變之悲也（朱鶴齡箋注・沈厚 集評『李義山詩集』卷下。台灣學生書局、一九七三年）

朱氏謂前半追感明皇貴妃臨幸時事、後半謂王涯等被甘露之禍、非也：此蓋傷文宗崩後、楊賢妃賜死而作也：詩首句謂文宗、次句謂賢妃、三四承上、五六則以甘露之變作襯、而謂傷春之痛較甚於此。蓋文宗受制閹奴、南司塗炭、已不勝天荒地變之恨、孰知宮車晚出、并不保深宮一愛姬哉（馮浩『玉谿生詩集箋注』卷一。上海古籍出版社、一九九八年）。

此詩專詠明皇貴妃事。首二句總起、言曲江之久廢巡幸、只有夜鬼悲歌、亟寫荒涼滿目之景。金輿一聯、言苑波猶分玉殿、而傾城已不返金輿矣。所謂傷春也。後二聯則言由今日迴想天寶亂離、華亭唳鶴、王室銅駝、天荒地變之慘、雖足痛心、然豈若傷春之感、愈足使人悲託耶（張采田『玉谿生年譜會箋』卷四。上海古籍出版社、一九八三年）

- (2) 此詩乃專詠甘露之變以及因事變引起之感慨、末聯為全篇主意之所在。天荒地變、即指流血千門、僵尸萬計之甘露事變、傷春則指感傷時事、憂念國家前途命運之情（劉學鍇・余恕誠『李商隱詩歌集解』一五四頁、中華書局、二〇〇四年增訂版）。

- (3) 本論に引用する李商隱詩の底本には劉學鍇・余恕誠『李商隱詩歌集解』（中華書局、二〇〇四年增訂版）を使用する。李商隱詩以外の引用の底本については以下の通り。戴叔倫

詩は蔣寅『戴叔倫詩集校注』（上海古籍出版社、二〇一〇年）、韋應物詩は孫望『韋應物詩集繫年校箋』（中華書局、二〇〇二年）、司空曙詩は文航生『司空曙詩集校注』（人民文學出版社、二〇一一年）、杜甫詩は仇兆鰲『杜詩詳注』（中華書局、一九七九年）、孟郊詩は韓泉欣『孟郊集校注』（浙江古籍出版社、二〇一二年）、『楚辭』は『楚辭補注』（中華書局、一九八三年）。これら以外の詩については全て『全唐詩』（中華書局標点本）に拠る。

- (4) 下定雅弘「李商隱の「曲江」をどう読むか——その「傷春」の意味——」（『新しい漢文教育』第五〇号所収、二〇一〇年）七二頁。

- (5) 「曲江」詩以外に「傷春」が用いられている李商隱詩は以下の通り。「寄惱韓同年二首」（其二）、「朱槿花二首」（其二）、「流鶯」詩「與同年李定言曲水閑話戲作」詩、「清河」詩、「杜司勳」詩。

- (6) 下定氏論文七五頁。

- (7) 下定氏論文七八頁。また下定氏はこうした解釈の妥当性を示す傍証として、①李商隱が詩の全篇で悲痛な事柄を詠じ、その上で結びの句で提示される感情こそが最も痛切であると詠じる例が「曲江」詩以外にも存在する事、②そうした「曲江」詩の末句が白居易「長恨歌」の結びの句（天長地久有時盡、此恨綿綿無絕期）を意識している事、の二点を挙げる。同論文七八―七九頁参照。

- (8) 「徒爲相思響、傷春君不知」（何遜「增新曲相對聯句」十一・十二句目、ただし当該句は劉綺のもの）「極望傷春目、

廻車歸狹斜」(劉孝威「登覆舟山望湖北」詩九、十句目)。また沈約に「傷春」詩一首がある。引用は全て遼欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』に拠る。

(9) この句について蔣寅氏は『論語』子罕篇の「子在川上曰、逝者如斯夫、不舍晝夜。」及び潘岳「秋興賦」(『文選』卷十三)の「臨川感流以歎逝兮」句を踏まえるとする。蔣寅『戴叔倫詩集校注』二二頁。

(10) 『唐才子傳』卷三に「(皇甫)曾字孝常、冉之弟也。天寶十二年楊僕榜進士(中略)仕歷侍御史、後坐事貶舒州司馬、量移陽翟令。」とある。傅琰琮氏は本文所掲の独狐及詩が、皇甫曾の舒州司馬離任に際し作られたものとする。『唐才子傳校箋』(中華書局、一九八七年)卷三、五八七頁参照。

(11) 曲江池、本秦世陞洲、開元中疏鑿、遂爲勝境。其南有紫雲樓、芙蓉苑、其南有杏園、慈恩寺。花卉還周、煙水明媚。都人遊玩、盛於中和、上巳之節。彩輻翠幃、匝於堤岸、鮮車健馬、比肩擊轂。上巳即賜宴臣僚、京兆府大陳筵席、長安、萬年兩縣以雄盛相較、錦綉珍玩無所不施。百辟會於山亭、恩賜太常及教坊聲樂。池中備彩舟數只、唯宰相、三使、北省官與翰林學士登焉。每歲傾動皇州、以爲盛觀(高駢『劇談錄』卷下)。底本は『開元天寶遺事 外七種』(歷代筆記小説大觀、上海古籍出版社、二〇一二年)所収のものに拠る(原文は簡体字)。

(12) 曲江之宴、行市羅列、長安幾於半空。公卿家率以其日揀選東床、車馬闐塞、莫可殫述(姜漢椿『唐摭言校注』卷三、上海社会科学院出版社、二〇〇三年、原文は簡体字)。

(13) 時鄭注言秦中有災、宜興土功厭之。乃濬昆明、曲江二池。上好爲詩、每誦杜甫曲江行云、江頭宮殿鎖千門、細柳新蒲爲誰綠。乃知天寶已前、曲江四岸皆有行宮臺殿、百司廨署。思復昇平故事、故爲樓殿以壯之(『舊唐書』卷十七下 文宗紀下)。底本は中華書局標点本。

(14) 「曲江」詩、「曲池」詩、「暮暮獨遊曲江」詩、「與同年李定言曲水閑話戲作」詩、「病中早訪招國李十將軍遇挈家遊曲江」詩。

(15) 馮浩は二首目について「舊作寄成都高苗二從事、誤也。戊籤作失題。余定其必爲上篇之次章、故作又一首。」と注する(馮浩『玉谿生詩集箋注』卷一)。今日ではこれがほぼ定説となっている。

(16) 詹滿江『李商隱研究』(汲古書院、二〇〇五年)第二部「李商隱の隱喻と諷刺」第五章「相如の消渴」三二三～三一四頁。

(17) 此傷己之飄蕩無所託而以流鶯自寓也(姚培謙『李義山詩集箋注』卷十一。中文出版社、一九七九年)。

(18) 紀昀評「前六句以鶯寓感、末乃結出本意、運意與蟬詩相類、但風格不及耳。」這裏指出風格高下、何以這詩的風格不及蟬詩呢?…本篇點明流鶯巧囀、不如蟬的不落痕跡。又蟬的由居高而難飽、由難飽而恨、由恨而費聲、由費聲而聲欲斷、用碧無情來反襯、一意聯貫、極爲自然。至於流鶯、所謂鶯遷、不一定是漂蕩、如「出自幽谷、遷於喬木」、不同於人的漂泊、它的巧囀、既非傷春、不同於哀鳴、不同於未有佳期。即本詩借鶯寓意、不如蟬的借蟬寓意的貼切自然

〔周振甫〕『李商隐選集』二九五～二九六頁。上海古籍出版社、一九八六年。

(19) 今謂進士登臺爲遷鶯者久矣。蓋自毛詩伐木篇詩云、伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶。出自幽谷、遷於喬木。又曰、嚶其鳴矣、求其友聲。并無鶯字。頃歲試早鶯求友詩、又鶯出谷詩、別書固無証拠、豈非誤歟(『劉賓客嘉話錄』)。底本は『教坊記 外七種』(歷代筆記小説大観、上海古籍出版社、二〇一二年)所収のものに拠る(原文は簡体字)。

(20) 具体的な作品を指すと見るのは朱鶴齡であり「杜牧惜春詩、春半年已除、其餘強爲有。即此醉殘花、便同嘗臘酒。悵望送春杯、殷勤掃花帚。誰爲駐東流、年年長在手。又贈別詩二首、娉娉裊裊十三餘、豆蔻梢頭二月初。春風十里揚州路、卷上珠簾總不如。多情卻似總無情、惟覺簾前笑不成。蠟燭有心還惜別、替人垂淚到天明。」とする(朱鶴齡『李義山詩集』卷上)。これに対し馮浩は「傷春謂宦途、傷別謂遠去。」と解釈し(馮浩『玉谿生詩集箋注』卷二、董乃斌氏は「傷春傷別、指杜牧詩內容多憂國憂時、感嘆人生之作。傷春、隱喻也。傷別、概指也。」とする(董乃斌『李商隐詩』二四二頁。人民文学出版社、二〇〇五年)。

(21) 下定氏論文七八頁

(22) 馮浩『玉谿生詩集箋注』卷二。

(23) 心鐵、猶胸中甲兵、指杜牧對時局、戰事之籌策。：牧又曾作守論、戰論、原十六衛、均論兵議政之文(劉學鍇・余恕誠『李商隐詩歌集解』九八五頁)。

(24) 下定氏論文七七頁。なお当該詩の本文は以下の通り。「海

燕參差溝水流、同君身世屬離憂。相攜花下非秦贅、對泣春天類楚囚。碧草暗侵穿苑路、珠簾不卷枕江樓。莫驚五勝埋香骨、地下傷春亦白頭。」下定氏はこの「傷春」について「七句は、曲江の水底に愛した人の遺骨が沈んでいることをいい、八句は、水底にいる彼女が私と同じように「傷春」の思いを抱き続けいまや白髪になっているだろうの意。この「傷春」は、実らなかった愛を怨み、春の盛りに命燃やすことかなわずして悶える女の思いである」と解釈する。同七七頁。

(25) 考义山伤春句约有五义…有伤自然之春、言一年四季之春天、春日…有伤年华消逝、感叹头颅老大、似水流年…有伤情爱失落、感叹青春不再、知音难求…有伤身世飘零、感叹仕途坎坷、理想破灭…有伤时日惟艰、感叹家国颓丧、唐祚不永…是所谓自然之春、年华之春、情爱之春、身世之春、家国之春(黄世中『類纂李商隐詩集箋注疏解』第五冊三七三六頁。黄山書社、二〇〇九年)。

〔付記〕本論は東北中国学会第六十三回大会(二〇一四年五月二十五日、於福島大学)での口頭発表に基づくものである。発表の司会を担当下さったお茶の水大学の和田英信先生、並びに貴重なご意見を賜った諸先生にはこの場を借りて再度お礼申し上げます。